９	尾北	犬山市立犬山北小学校	オオヤブ　サオリ 氏名　大　薮　早　織

分科会番号	１４	分科会名	特別支援教育

研究題目

自分の考えや気持ちを表現することができる児童の育成

―特別支援学級　自立活動「自分なりの表現で気持ちや考えを伝えよう」の実践を通して―

１　主題設定の理由

今日の特別支援教育を巡る状況において、教育的ニーズに合わせた特別支援の必要性がさらに高まっている。私が担任している特別支援学級は、学年や発達段階において個々に大きな差があり、４５分間集中して学習することや一斉指導の学習に落ち着いて話を聞き、理解しながら取り組むことが難しい児童もいる。児童一人一人のニーズに合わせた支援の大切さと難しさを日々感じている。

様々な課題の中で、本学級の児童に共通する課題として、自分の考えや気持ちを表現することの難しさが挙げられる。伝える手段の少なさから気持ちを上手く伝えることができなかったり、自分の考えを表すことに自信をもてず、思いを表現することに消極的になったりと、共通する課題の中でも一人一人異なる実態がある。自分の考えを表現することは、他者に自分の思いや困り感を伝え、自立して生活するために必要な手段である。児童が自立し、多様な人々と協働するためには、自信をもち、自分の考えや気持ちを伝える意欲をもつことができるようにすることが大切であると考えた。

そこで、本研究では、児童が自分の気持ちを理解し、一人一人に合った方法で自分の考えや気持ちを表現できるようになることを目指した。そして、様々な場面で自分の気持ちを表現できたという成功体験を積み重ねることで、自分の考えを進んで表現できる児童を育成したい。

２　研究仮説と検証方法

（１）目指す児童像

本研究では、次のような児童像を目指す。

○　自分の考えをもち、自分なりの表現で表すことができる子
○　自ら表現方法を選び、自分の考えや気持ちを表現しようとする子

（２）研究の仮説と手だて

本研究では、次のような仮説を立て、具体的な手だてを講じて研究を進めることにする。

仮説１　言葉や身振りなどの表現方法を具体的に伝え、それを体験させる活動を繰り返すことで、自分の考えや気持ちを表現する子が育つだろう。

ア　【手だて１】気持ちを表す言葉を調べ、気持ちを表す言葉集めをする。また、集めた言葉を使って、自分の考えや気持ちを表現する活動を繰り返す。

国語教材「言葉の宝箱」（光村図書）を使って気持ちに合う言葉を調べ仲間分けしたり、表情や場面のイラストに合った気持ちを表す言葉を考えたりする活動を行う。表情と気持ちを表す言葉を結びつけることで、語彙力を高めることができるようにする。また、繰り返し言葉を使うことで言葉の意味や使い方を知り、適切な言葉を使って表現できるようにする。

イ　【手だて２】表情クイズをする。

授業の導入で、表情クイズをする。イラストや写真を提示し、提示された物が好きなら笑顔、嫌いなら不快な様子を表す表情をしたり、出題者の表情を見て好きか嫌いかを当てたりする。表情を使って表現したり人の気持ちを読み取ったりすることで、表情や身振りを使った表現を理解し実践できるようにする。

仮説２　　表現方法を多く提示し、児童が自ら選ぶようにすれば、自分の得意な方法や表現したいと思う方法を見つけ、表現しようとする意欲をもつことができるだろう。

ウ　【手だて３】考えを表現する手段として、タブレット端末を活用するなど、多種多様な方法を提示し、繰り返し表現する場を設ける。

考えを表現するには、話し言葉、書き言葉、表情、身振りなど多くの方法があることを児童に伝える。また、自分の考えを表現することが苦手な児童でも、タブレット端末を活用すると考えようとする姿が見られるため、タブレット端末を用いた表現も選択肢の中に入れる。多種多様な方法で表現する活動を繰り返すことで、自分に合った表現方法を見つけられるようにする。

（３）検証方法

本学級は４名の自閉症・情緒障害特別支援学級である。本研究では、２名の抽出児童を設定し、児童の変容を追うことで、仮説の検証を行うことにした。抽出児童の現状は以下の通りである。

ア　A児

A児（４年生）は、人と関わることを好み、進んで挨拶をする。しかし、慣れるまでは笑顔で近くにいることを楽しんでいる様子で、自分から話しかけることが難しい。不安なときや自分の考えをうまく伝えられないときは、「何？」「わからない。」と言い、すぐに助けを求めようとする。表現するための語彙が少なく、具体的に説明することが難しい。そこで、自分の考えを伝える方法や語彙力を身に付けたり、自分なりの表現方法を選び、進んで表現したりしてほしいと考えた。

イ　B児

B児（６年生）は、一人で過ごすことが多い。友達と関わりたい気持ちはあるが、自分の思いを素直に伝えることが難しい。また、自分中心で物事を捉え、思い込みで友達の気持ちを解釈することがある。また、自分自身に関することについて考えて答えることが苦手で、気持ちや考えなどを問われると、「わからない。」「特になし。」と答え、考えようとしないことがある。そこで、課題に対して最後まで向き合いながら、自分の考えをもち、自分なりの表現方法を選び、進んで表現してほしいと考えた。

３　研究計画

本研究を行うにあたって、日常生活の場面で自分の気持ちや考えを表現する力を培うため、自立活動の中で「自分なりの表現で気持ちや考えを伝えよう」という単元を設定し、学習を行った。

本単元は、特別支援学校学習指導要領　第７章自立活動の以下の内容を受けて設定した。

３　人間関係の形成 （２）他者の意図や感情の理解に関すること （３）自己の理解と行動の調整に関すること ６　コミュニケーション （１）コミュニケーションの基礎的能力に関すること （２）言葉の受容と表出に関すること （４）コミュニケーション手段の選択と活用に関すること

単元計画は、以下の通りである。

【単元　「自分なりの表現で気持ちや考えを伝えよう」16 時間完了】

時数	ねらい	主な学習活動・内容
３時間	○　いろいろな気持ちがあることを知る。 ○　気持ちを表す言葉を、３つのグループに分類することができる。	・　気持ちの言葉集めをする。 ・　ポジティブな言葉・ネガティブな言葉・どちらとも言える言葉にグループ分けをする。
３時間	○　表情のイラストを見て、どのような気持ちか言葉で表すことができる。	・　表情のイラストを見て、表情に合う気持ちを表す言葉を集める。児童の実態に合わせて、自分で思いついた言葉を書いたり「ことばのたからばこ」で調べたり、選択

	○　表情のイラストを見て集めた言葉が適切か話し合い、気持ちポスターを作ることができる。	肢から選んだりする。 ・　表情のイラストに合う言葉を集めて、気持ちポスターを作る。 ・　気持ちを表情や身振りで表し、イメージをもつ。
4時間	○　場面絵を見て、自分ならどのような気持ちになるか考え、自分なりの方法で表す。	・　選択肢から選ぶ、気持ちを言葉で書く、その時の台詞を書く（言う）、役割演技をするなど、表現できる方法を自ら選び、気持ちを表現する。
4時間	○　場面絵を見て、自分がどのような気持ちになるか考え、自分なりの方法で表す。 ○　場面絵のような状況のとき、自分なりの対処方法を見つけることができる。	・　登場人物が複数いる場合は、児童の実態に合わせて、どの人物の気持ちを考えるか指定し、気持ちを考える。 ・　対処方法を考え、言葉で説明したり、役割演技をしたりするなど、表現方法を選んで発表する。
2時間	○　これまでに学習してきたことを踏まえて、自分の気持ちや自分ならどうするかを振り返り、「なかよしノート」を作る。	・　「こんな時にこんな気持ちになる。」「こんな時は自分ならこうする。」といった自分自身の気持ちや考え方を振り返るノートを作成する。

４　研究の実際

（１）手だて１　気持ちを表す言葉を集め、気持ちポスターを作る。

日常生活の中で、話したり書いたりして表現するには、状況に応じて適切な言葉を知ることが必要である。語彙を増やすため、まずは、気持ちを表す言葉を調べる活動を行った。国語の教科書教材「言葉の宝箱」には、気持ちを表す言葉が各学年の実態に合わせてまとめられている。本学級の児童の発達段階を踏まえて、理解しやすい言葉の中から、どんな気持ちを表す言葉があるかを調べた。調べた言葉は、Google の Jamboard にまとめた（資料１）。Jamboard では、一つの付箋に一つの言葉を記入し、よい気持ちを表す言葉は赤、嫌な気持ちを表す言葉は青、どちらともいえる言葉やどちらに分類したらよいか分からない言葉は緑の付箋を使うよう伝えた。言葉を付箋に記入した後、資料１のように同じ色の言葉を集めて、見やすく整理させた。自分で言葉を調べて、整理する活動を行うことで、気持ちを表現するための言葉の種類を知り、語彙を増やすことができた。

資料１　Google Jamboard を使った言葉集めノート

Ａ児は、日頃、作文や感想文を書くときには、自分の気持ちを問われても「うれしい」「楽しい」などの使いやすい言葉を書くことが多く、語彙が少ない。しかし、この活動では、気持ちを表す言葉が整理された教材を使う中で、知っている言葉が出てくることを楽しみながら、自分のイメージで色分けし、進んで活動に取り組む姿が見られた。分からない言葉は、国語辞典で調べてから色を決めており、言葉の意味を理解しようとしていた。

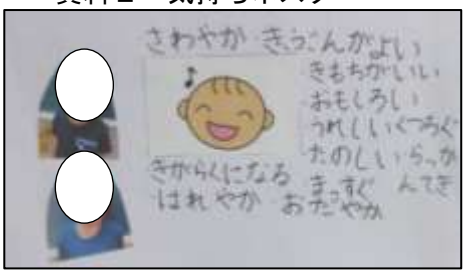
Ｂ児は、自分の気持ちを問われると、気持ちを考えることに対する苦手意識から「特になし」と答えることがあり、気持ちを表す活動に消極的である。しかし、この活動では、気持ちを表す言葉を分類することに興味をもち、進んで活動に取り組んだ。２年生から６年生の教科書教材から言葉を調べ、Jamboard に４シート分もまとめることができた。

個別に言葉集めノートを作った後、集めた言葉と気持ちを表す表情を結び付ける活動を行った。表情を表すイラストを提示してそのイラストに合う言葉を発表し合い、それを児童が「気持ちポスター」として、まとめたものを作成した（資料２）。話し合うときには、実際にイラストと同じ表情をするよう伝えた。その表情の写真をとり、ポスターにも貼ることで、視覚的に自分や友達の表情と言葉を結び付けることができるようにした。笑っているイラスト、泣いているイラスト、困っているイラストなど８種類のイラストに合った

言葉を考えた。嫌な気持ちを表す言葉の中でも、イラストの違いによって表現する言葉が変わってくる。A児が発表した言葉に対して、B児が「他のイラストの方が合うものがあるのでは」と意見を出しながら、ポスターを作っていく様子が見られた。

言葉集めノートや気持ちポスターは、単元を通して、特定の状況下や場面におかれた時の気持ちを考える活動で表現するためのヒントとして活用した。

資料２　気持ちポスター



（２）手だて２　表情クイズをする。

表情や身振りを使って自分の気持ちを表現することは、大切なコミュニケーション手段の一つである。また、自分で表現するだけでなく、友達や教師などの他者の表情にも興味をもち、読み取ることがコミュニケーションをとるための基本となると考える。そのため、毎時間の授業の導入で表情クイズを行った。

最初は、いちごやケーキ、とうがらしなどの食べ物のイラストや写真を提示し、提示された物が好きなら笑顔、嫌いなら不快な様子を表す表情をするよう伝えた。児童にとって身近で好き嫌いがはっきりしている食べ物を題材とすることで、興味をもって活動に取り組んでいた。表情で表現することが苦手な児童には、好きは笑う、嫌いは泣く、といった端的な表現でもよいことを伝えた。身振りを使ってもいいことを伝えると、手で万歳をして好きであることを表現したり、手を目の近くに当てて泣き真似をして嫌いであることを表現したりして、体全体で表現することができていた。また、友達や教師の表情を見る場を設け、目や眉、口など顔のパーツに着目しながら、どのように表現しているかを話し合った。

A児は、表情豊かに表現し、時には身振りをつけながら表現することができた。周りの人の表情について話し合ったときには、「まゆげが下がっているから、嫌いな顔」「目が細くなって口の横の方が上がっているから笑っている。これは、好きな顔」というように、細かな顔のパーツの動きに注目して、発言することができた。

B児は、表情で表すことが苦手であり、最初は活動に消極的だった。自分が好きなものが出ると、口角を上げて、笑うような表情をするようになった。題材に対して、教師が好きか嫌いかを当てるクイズでは、教師が大げさに表現すると、進んで答えていたが、他の児童が表現すると、「わからない」と答えるなど、表情の些細な動きを感じることは難しいようだった。

（３）手だて３　自分の気持ちを多種多様な表現方法から選び、考えや気持ちを表現する。

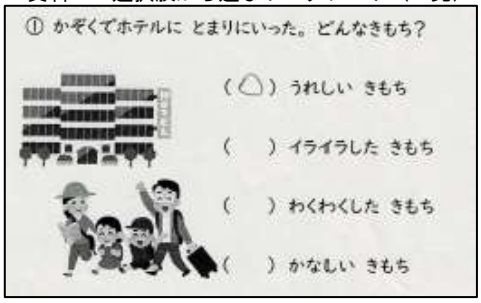
単元の後半は､場面絵を提示し､設定された場面で自分がどのような気持ちになるか考える活動を行った。

ア　特定の状況下において、自分の気持ちを想像する活動

後半の最初の４時間は、「ホテルに泊まりに行ったとき」「石につまづいてこけたとき」というように具体的な場面を想像し、自分ならどのような気持ちになるか考える課題を提示した。児童には、自分の考えを表す方法として、ワークシートやタブレット端末を使う方法を提示した。提示された方法の中から、自分で表現したい方法を選び、取り組むことができたときは、他の方法を選びさらに取り組むよう伝えた。

ワークシートは、自分の考えに近いものを選んだり（資料３）、自分で考えた気持ちを書いたりすることができるようにした（資料４）。

資料３　選択肢から選ぶワークシート（A児）



資料４　自分の考えを言葉で表現するワークシート（A児）

タブレット端末では、Jamboard にワークシートを作成し児童に提示した。自分の気持ちに合う表情のイラストを選び、言葉集めノートを作成した時と同様、色分けしてその時の気持ちを付箋に書き込むように指示した。

A児は、最初は選択肢のある簡単なワークシートを選んだ。記入が終わると、さらに自分で言葉を記入するワークシートを選び学習を進めていった。しかし、いざ言葉で書こうとすると、なかなか思い浮かばず困っている様子だった。「うれしい」と記入した後、「タブレット端末でも取り組みたい。」と言い、言葉集めノートで言葉を探したり、自分ならどんなことを話すか考えたりしながら、自分の考えを書くことができた（資料５）。

B児は、最初は資料４の記述式のワークシートを選んだ。しかし、言葉があまり思い浮かばず、一言書いて終わることが多かった。ワークシートに記入した後は、Jamboard の活動に取り組んだ。すると、付箋を増やしていくつも言葉を書き込むことができていた（資料６）。中には、「本当は少しワクワク」といった言葉をシートの隅に隠しながら載せるなど、自分なりの表現方法で気持ちを表すことができていた。

資料５　Google Jamboard を使ったワークシート（A児）

資料６　Google Jamboard を使ったワークシート（B児）

イ　人との関わりにおいて自分の気持ちを表現する活動

後半の４時間は、資料７のような「あきとさんがおもちゃで遊んでいる。急に、そらさんが、あきとさんのおもちゃをとった。２人はどのような気持ちか。」というように、日常生活での人との関わりで、どのような気持ちになるか考える活動を行った。児童の発達段階に合わせて、誰の気持ちを考えるか指定し、ワークシートを工夫した。A児には、自分の気持ちのみを考えさせた。B児には、自分と相手の気持ちを考えたり、対応の仕方について考えたりするよう指示した。前半と同様に、ワークシートと Jamboard で考えを表す選択肢を指示した。また、友達と考えを共有する場では、役割演技をし、表情や身振り、話し言葉などを使って自分の考えを表す場を設定した。

資料７　ワークシートの見本

A児、B児共に、前半の活動で自分の考えを表現する活動を繰り返してきたこともあり、想像した場面での自分の気持ちについて、多くの考えをワークシートに表すことができるようになった。

A児は、ワークシートに自分ならどんな顔をするか考えて絵を描き、その表情から遊んでいる時の気持ちを書き込んでいった（資料８）。言葉が思いつかなくなると、言葉集めノートで調べながら書き進めた。自分の考えを多く書くことができるようになったが、一方で、言葉の意味を理解しないまま選ぶこともあった。資料８の「さわやか」という言葉については、意味を問うと、いい気持ちを表す言葉だったという理由で選び、場面に合うのかということについては考えられていなかった。

B児は、両者の立場に立って気持ちを考えていった。学習を繰り返すことで、タブレット端末で考える方が自分の気持ちを表現しやすいことに気付き、進んで取り組んだ。気持ち

資料８　おもちゃで遊ぶ児童の気持ちを考えた時のワークシート（A児）

資料９　おもちゃをとりあっている児童の気持ちを考えた時の Google Jamboard（B児）

を自分なりの言葉で表現し、より話し言葉に近い形で表していた（資料９）。「おもちゃを取らずに気持ちを伝え、２人が仲良く遊ぶためにはどのようにすればよいか」という問いに対しても、「貸してと言葉で伝え、一緒に遊ぶ」というように、Ｂ児なりの解決法を見つけることができていた。

５　考察

（１）仮説１「言葉や身振りなどの表現方法を実践し、繰り返し活動する中で身に付ける」

手だて１について、これまでは気持ちを表すときには、「嬉しい」や「悲しい」といった表現が多く、常に同じような言葉で表現することが多かったが、Ａ児、Ｂ児共に、場面の様子や人物の表情から想像し、多様な表現で表すことができるようになった。この単元では、さまざまな表現活動を行ったが、同じ活動を繰り返す中で、ワークシートに書く語彙が増加した。特に、Ａ児については、言葉集めノートを作成したことで、言葉の意味に興味をもち、国語辞典で意味を調べながら、場面に合った言葉で表現しようとしていた。言葉の理解が難しい部分もあるが、日常生活の中で使いやすい言葉については進んで使おうとする姿が増えた。

また、Ｂ児は、表現することに対して自信をもつことができた。単元前後に行ったアンケートによると、「自分の気持ちを人に伝えることが得意である」という問いに対して、Ｂ児は「苦手」から「まあまあ得意」という回答に変化した。この単元を学習するまでは、教科の授業の振り返り等で、「わからない」と書くことが多かったが、繰り返し表現する活動を行ったことで、Ｂ児自身が自分なりに表現できるようになったと感じることができたと考えられる。

手だて２について、表情クイズを繰り返し行うことで、Ａ児は、表情豊かに表現することができるようになった。他者の気持ちの読み取りについては、顔のパーツに着目しながら表情を観察し、気持ちを想像することができるようになった。また、特定の状況下において自分の気持ちについて考えた後に友達と意見交流する際、役割演技に進んで取り組み、表情豊かに身振りをつけて発表する姿が見られた。

よって、仮説１に対する手だては有効であったと言える。

（２）仮説２「表現方法を多く提示し、児童が自ら選んで表現することで、表現する意欲をもたせる」

手だて３について、自分の気持ちを「話す」「書く」「表情で伝える」など様々な手段で表現するために、ワークシートやタブレット端末、役割演技など様々な方法を提示した。その中で、Ａ児、Ｂ児共に、ワークシートやタブレット端末を使った表現に進んで取り組んだ。

Ａ児は、最初は言葉だけで表現することが多かったが、ワークシートに記入する際に絵で表情を描いたり言葉で表したりと、多様な方法で取り組むようになった。タブレット端末を選んだ時には、自分が考える気持ちに合う色の付箋はどれか考えながら、多くの言葉を入力しようとしていた。Ｂ児は、タブレット端末で表現することを得意とし、色分けをしながら気持ちを考えることを好んで取り組んだ。どちらの児童も、多様な選択肢の中から表現方法を選ぶことを繰り返す中で、自分の表現しやすい方法を考えながら進んで表現活動に取り組むことができていた。

よって、仮説２に対する手だては有効であったと言える。

６　成果と課題

今回の研究における手だては、同じことを手法を変えながら繰り返すことによって、言葉や身振りなどの表現方法を習得し、実際に自分の表現に生かせたという点で効果があった。また、多種多様な表現方法を提示し、自ら選択させることで、自分が得意な表現方法を知り、表現すること自体への抵抗をなくし自信をもたせることができた。ただ、すべての手だてがどの児童にも有効であるとは言えなかった。例えば、Ａ児には多くの手だてにおいて効果が表れたが、Ｂ児は表情を表すことへの苦手意識があるため、Ｂ児にはあまり効果が表れないものもあった。特別支援学級にはさまざまな児童がおり、個に合わせた支援を行うには、多様な手だてを実践し、その効果を見極めながら試行錯誤していくことが必要となる。今後も、さまざまな手だてを講じていきながら、それぞれに合った効果的な手だてを考えていきたい。